

## 研究の成果

就学前の遊びの中の学びから、教科的な学びへと円滑な接続を図るため、スタートカリキュラムにおける「なかよしタイム」の見直しから取り組むこととした。

スタートカリキュラムを見直すうえでの合言葉は、「これまでの経験を生かす」。児童一人ひとりの就学前教育施設での経験を生かすことができる環境づくりを土台とし、児童主体の活動を中心に据えた指導の工夫・改善を行った。

### スタートカリキュラムを構成する3つの活動

- **なかよしタイム**  
(安心して学び、学びの芽を育てる活動)
- **わくわくタイム**  
(生活料を中心とした合理的な学習)
- **ぐんぐんタイム**  
(教科の学びの素地となる活動)

## 1 なかよしタイムの工夫

就学前の生活では、登園したら支度をして、それぞれ遊んでいた。高井戸第三小学校でも、登校したら、ランドセルはそのままロッカーへしまい、その後は好きな遊びをしてなかよしタイムを過ごす。

就学前の生活と同じであるため、児童は自然な流れで遊びを選び、過ごしていた。

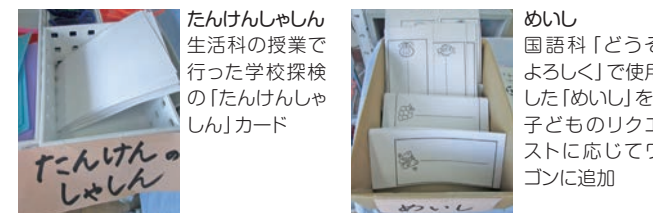


就学前の支度の流れを取り入れたなかよしタイム

## 2 なかよしワゴンの中身の工夫

なかよしタイムの際には、「なかよしワゴン」を活用した。就学前の生活においても、幼児が同じようなワゴンや棚を使い、自分で好きなものを選んで遊んだり、片付けたりしている姿があることから、取り入れることとした。

ワゴンの中には、当初、昔遊びの道具や塗り絵、折り紙などを準備し、教室に置いた。すると、児童がワゴンの周りに集まり、それぞれの遊びが始まった。座って教師の一斉指示があるまで待つという姿ばかりが正解なのではなく、自然と遊びが始まり、こまが得意な子が友達に教えたり、塗り絵をしながら同じグループの児童と話したりする姿が見られた。また、



教室に配置された「なかよしワゴン」

けん玉

こま

## 3 6年生と朝の支度の一斉指導

登校後の持ち物の整理等について、担任が一斉指導を行う際には、6年生も一緒に説明を受けた。棚の使い方、教具の準備の仕方等、分からないことがあれば、近くの6年生にすぐ聞くことができ、落ち着いて授業の準備を行うことができた。



1年生に寄り添いながら担任の話聞く6年生

## 5 グループの机の配置

不安と期待が溢れる入学式当日、児童の席をグループの机配置にした。グループの児童同士は自然と挨拶し、会話できた。早く学校に慣れたい、友達を作りたい、安心して過ごしたいという願いが叶った。

- 早く学校に慣れたいな。
- 友達できるかな。
- 安心して過ごしたい。

## 4 リズムに乗って、呼名と返事

担任と児童という、一対一の関係にとどまっていた活動も、このような工夫を行うことで、児童同士が互いを意識し合い、横のつながりが生まれた。健康観察の時間も、楽しく温かな雰囲気となった。



リズムに乗って、呼名と返事



入学式を待つ児童

### ご指導いただいた先生

東海大学児童教育学部児童教育学科  
准教授 寶來 生志子先生

杉並区立就学前教育支援センター tel : 03-5929-9480  
杉並区立高井戸第三小学校(研究実践校) tel : 03-3302-0181

### 研究主題

# 「遊びの中の学びから 教科的な学びへ」 ～就学前の経験を生かした指導の工夫～

## スタートカリキュラム



## 杉並区立就学前教育支援センター

## ご挨拶

杉並区教育委員会 教育長  
渋谷 正宏



子どもたちは、小学校入学前の幼児期において、遊びを通して多くのことを学び、豊かな経験を積み重ねています。この就学前教育で育まれた資質や能力は、小学校以降の学びや生活の基盤となり、その後の成長を支える大切な土台となります。

杉並区では、一人ひとりの発達や学びを切れ目のないようにつなげるとともに、学びの成果を確実に受け止め、次の段階で一層発展できるよう、平成26年に「杉並区幼保小接続期カリキュラム・連携プログラム」を策定し、就学前教育と小学校教育の円滑な接続を目指した教育及び保育を推進してまいりました。

こうした従来の取組を踏まえて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、就学前教育施設及び小学校が相互理解を深めるとともに、具体的に小学校でどのように活用していくべきかについて、更なる研究が必要であると認識し、令和4年度に杉並区立高井戸第三小学校を研究指定校とし、この度の研究に至りました。

本研究では、杉並区教育ビジョン2022において、一人ひとりが教育の当事者として心がける視点として掲げている「子どもの思いを尊重」した入学当初のスタートカリキュラムの工夫・改善を通じて、子どもたちが主体的に学びに向かう姿勢を育むことを目指してまいりました。その結果、小学校における教科的な学びにもその力を発揮することができる教育の在り方について、多くの示唆を得ることができました。

結びに、研究に当たって御指導を賜りました、東海大学児童教育学部児童教育学科准教授 寶來生志子先生をはじめ、全ての関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、本研究成果が幼保小の架け橋プログラムの理解と充実の一助となり、主体的・対話的で深い学びの実現と、一人ひとりの多様性に配慮した全ての子どもの学びや生活の基盤の育成につながるよう願っています。

## 研究実践校の教員の声

本研究では、児童が就学前教育施設で培ってきた多様な経験を最大限に生かすことを最も重視してきた。そのためには、まずは、就学前教育施設と小学校の両者が連携の意識をもち、共通理解を図ることが重要であると考え、対話を積み重ねることから始めた。そして、幼稚園教諭・保育士と小学校教員との相互理解が深まり、幼児教育と小学校教育との円滑な接続の土台を形成していった。

これらの取組を踏まえ、研究の2年目からは、小学校入学当初の児童の思いを出発点にしたスタートカリキュラムの工夫・改善を行った。また、評価と見直しを継続的に行うことで、人間関係の形成と児童の主体的な学びを支える環境の整備にも取り組んだ。そうすることで、児童が安心して小学校生活へと移行し、学びを深められる基盤を構築した。

スタートカリキュラムの取組を通して、児童は、大きな困り事を抱えることもなく、小学校生活をスタートすることができた。そして、「学校は楽しい場」であると感じ、その後の生活への期待も大きく膨らんでいった。教科的な学びにおいても、自らすずんで何事にも挑戦しようとする意欲的な姿が見られ、主体的に取り組み、自ら解決する力につながったことを児童も教員も実感することができた。